

室町時代の遺品 (第7報)  
 福島大教育 栗原 澄子

目的 室町時代の遺品といわれている現存の「唐衣」・「袷」・「薄衣」類が、同じ名称で呼ばれながら、その形態がさまざまであったり、同じ名称のものであっても、そのぬのの扱いかた・縫製に用いた糸(色や太さ)の扱いかたなどがらがっているので、それらの使い分けをしらべる。

方法 室町時代の製作と考えられている熊野速玉大社の御神服である遺品類74品のうち、今回は「唐衣」・「袷」・「薄衣」など42点のみを調査対象とし、実態調査による報告をする。

結果 形態は、「唐衣」はさまざまあり。「袷」と「薄衣」は袖にふりのないものとあるもの。「薄衣」は袖口・ふり・襟外回り・襟先・襟下・裾などが耳や裁ち切りのまま用いたものがあつた。ぬのの扱いは、「唐衣」・「袷」・「薄衣」とも、それぞれ異なる様あつた。縫製に用いた糸は、「唐衣」はどれも白糸、糸の太さは、/頷に太い糸と細い糸・太い糸だけ用いたもののもつた。「袷」は、白糸・井色糸・白糸と井色糸の3種あり、太さは、太い糸と細い糸・太い糸・細い糸の3種あつた。「薄衣」は、白糸・井色糸の2種あり、太さは、どれも細めの糸が用いてあつた。これらの使い分けは、同時期に奉納されたと思われるものが、だいたい同形態であり、ぬのや糸も同様な扱いがされている。また、これらがいかなる理由で使い分けられたか、時代による相異があるかなどについては、今後の多くの遺品調査により明らかにしたいと思う。